

日本の野球技術書にみる打撃技術の歴史的変遷

佐治大志

キーワード：打撃技術の高度化，野球の広まりと打撃技術，勝つための打撃技術

1. 研究の動機

運動技術の発生・発達過程を知ることは、現在も変わり続けている運動技術を正確に捉える上で、非常に重要だと感じている。しかし、スポーツ技術史の歴史研究はごく断片的にしか行われておらず、これは野球においても同様である。そこで、打撃技術がどのように変遷しているかを紐解くことで、現在も変わり続けている打撃技術を正確に捉え、指導法の改善点が発見されるのではないかと考え、本研究を行うことにした。

2. 研究の目的と意義

過去の野球技術書から、打撃技術の変遷を紐解くことで、現在の打撃指導を見直す手掛かりとなることを目的とする。現在の打撃指導の一助となることを意義とする。

3. 先行研究の検討

野球の技術史研究において、先行文献は非常に限られている。その中でも、本研究と類似した研究として、鈴木（2015）『野球における投手の投球に関する運動技術史的研究』がある。

鈴木は、投球フォーム等の技術の進化を、ルールの変更、道具の進化等、当時の時代背景から考察している。

また、福井は、『高校野球界における金属製のバットの導入と技術・戦術の変容』において、打撃技術・戦術の変容に関する記述をしているが、対象時期が、高校野球において金属バットが導入される昭和40年前後である。

太平洋戦争以前の打撃技術史研究は存在しなかった。

4. 研究の課題と方法

打撃技術の最初の野球技術書の出版（1896年）から、太平洋戦争による野球の中断を研究

対象期間として、この期間における打撃技術の変遷を、野球技術書を史料として跡付ける。そして求められた打撃技術の特徴に基づき時期区分し、各時代にいかなる技術が重要とされ、いかなる背景の中でそれが変容したのかについて考察する。史料として用いる野球技術書は、日本における体育・スポーツ書を網羅した書誌である『体育・スポーツ書解題』に記載されている全58冊である。

これらの史料に関して、それぞれが、当時何冊販売され、どのような影響を与えたか、ということが、打撃技術史を紐解く上で非常に重要になる。しかし、それらを特定する方法がない。そのため、それぞれの史料の影響力の大小を考慮せず、考察した。史料研究の限界として記述しておく。

本研究では、上記の野球技術書を用いて、以下の2点を検討することを課題とする。

1) 日本の野球技術書にみる、打撃技術の歴史的変遷

2) 過去の打撃指導の実態

5. 本論

本論は、打撃技術の特徴に基づいて時期区分し、3章構成にした。第1章「野球の伝来と打撃技術」（1896年～1912年）、第2章「学生野球大会の発生と打撃技術」（1913年～1931年）、第3章「国家の野球への締め付けと打撃技術」（1932年～1945年）である。

5.1 野球の伝来と打撃技術

第1章で対象とした期間では、前半（1896年～1902年）において、「打球方向」「変化球への対応」に関する記述が見られた。「打球方向」に関して、「1塁ベースに最も遠い方向（レフト方向）に打った方が良い」ということ、「ラ

ンナーがいるときは、ランナーが目指す塁に打ってはいけない」ということなどが述べられていた。「変化球への対応」に関して、「力んでバットを振ると、ボールの急な変化に対応できないので、強く振らず、ボールをよく見なければならぬ」ということが書かれていた。後半（1903年～1912年）では、「バットの握り方」「バットの軌道」「打順」に関する記述が多く見られた。「バットの軌道」に関して、「水平に振れ」という記述が多く見られた。「打順」に関して、「1番は出塁率が高い選手、2番は送りバント、進塁打を打つことが上手い選手、3, 4, 5番には強打者を置き、6, 7, 8番は打力が高い順に並べ、9番に投手を置くべきだ」という記述があった。

5.2 学生野球大会の発生と打撃技術

第2章で対象とした期間では、「打ち落とすように打て・球の上部を打て」「バーバルな」「シングルの必要」という記述が多くみられる。「バーバル」とは、当時、「フルスイングしすぎてバットコントロールがおろそかになる」という意味で用いられた言葉であり、良くないという記述が多くの文献にあった。「シングルの必要」として、「ロングヒットを狙うと打率が低くなる」ことが様々な文献で述べられており、学生野球人気が高まり、如何に試合で勝つための打撃をするか、という風潮の現れだと考えられる。後半（1920年～1931年）では、「ウェイティングシステム」という戦法が多く取り上げられていた。「ウェイティングシステム」とは、待球主義とも呼ばれ、相手投手の与四球を期待するため、または投球数を増やすために、積極的にヒッティングをしない戦法である。本来、ヒッティングを楽しむスポーツである野球において、与四球を期待する戦法について議論がなされていたことから、勝つための打撃技術の過熱化がうかがえる。

5.3 国家の野球への締め付けと打撃技術

第3章では、「国家の野球への締め付けの社会的背景」「打撃技術書にもみられる戦争への

影響」「当時の打撃技術の特徴」を取り扱った。

野球が世間から批判される中、1932年の「野球統制令」や1937年の「国民精神総動員」など、野球への締め付けが強まった。そこで野球界は、野球の精神性を強調することによって生き残りを図り、野球は魂の洗練が唯一の目的であり、練習に試合に苦行難行が積まれるもので、死の練習を行うことにより武士道的野球を体得できると主張した。そのような大義名分のもと、野球は行われた。打撃技術書にも、「野球は戦争の縮図なり」という記述があり、国家の野球への締め付けへの対応だと感じ取れた。

第3章で扱った時期の打撃技術・戦術は、第2章で扱った期間から、あまり大きな変化は見られなかったが、戦術に関して、より深い考察が見られた。ウェイティングシステム、ボール球を如何に見逃すか、などに関して、多くの記述があった。第2章で扱った時代と比較すると、より細かな点まで指摘されている。これは、ウェイティングシステムなどの戦術を用いて、実際に現場で起こったことを中心に述べられているためだと思う。実際に大学野球どのような戦術が用いられ、その試合がどうなったかなどの具体的な記述も見られ、采配に対する世間の興味の高まりも窺えた。

6. 結論

本研究の中で、技術論は時代の流れ、競技レベルの高度化とともに変容していくということが感じられた。

野球が伝来し、普及し、学生野球が国民の生活に浸透するという流れとともに、打撃技術が高度化し、「勝つための戦術」が現れるまで成長した。また、投手のレベルや守備のレベルが上がると、「レフト方向に打つ」だけではヒットにならなくなり、「変化球への対応」が必要になり、打てない試合では、「ウェイティングシステム」を導入しなければならなくなった。技術論は、社会の変化、競技レベルの変化とともに更新し、生まれ変わっているのである。